

外務大臣が帰国したJICAボランティアに感謝状を授与

01



任期を終えて帰国したボランティアたちを激励する武井外務大臣政務官



チリで日本語教育に関わったシニア海外ボランティアの篠宮佳代子さんは、現地の人たちの優しさを振り返った

3月24日、東京都新宿区のJICA市ヶ谷ビル国際会議場で外務省主催の外務大臣感謝状授与式が開催され、2年間の活動を終えて帰国したJICAボランティア43人が参加しました。授与式には、「日本の国際協力―特に青年海外協力隊の活動―を支援する国会議員の会」(JICA議連)所属議員をはじめとする国会議員や、民間連携ボランティア制度を活用した帰国隊員の所属先代表者も、来賓として参加しました。

授与式の冒頭、武井俊輔外務大臣政務官は、帰国したJICAボランティアに対して「時間を守る、ものを片付けるなど、日本では当たり前のことの必要性を現地の人に伝え、根付かせる活動をしているボランティアは、まさに草の根外交官。現地の皆さんからの感謝、思いを糧に今後も活躍してほしい」と、帰国後の活躍に向けて激励の言葉を掛けました。

一方、JICAボランティアを代表して、モザンビークで青年海外協力隊のPCインストラクター隊員として活動した沖縄県出身の濱元翔太さんがあいさつし、「つましい生活の中でも笑顔を絶やさず生きていくことの楽しさを、モザンビークの人たちから学びました」と現地での生活を振り返りました。

授与式後の懇談会では、来賓の国会議員各氏が2年間の活動に対するねぎらいの言葉と共に、今後の日本での活躍を期待する言葉を掛けていました。また、帰国した青年海外協力隊員2人が所属する企業からは、「日本と異なる環境で活動した社員はたくましく成長し、リーダーシップを期待できる」と評価する声がありました。こうした励ましの言葉に対して、参加したボランティアたちも自分たちの活動を振り返り、今後の抱負などを述べました。

これまで、青年海外協力隊は88カ国・延べ42577人、シニア海外ボランティアは75カ国・延べ6151人、日系社会青年ボランティアは9カ国・延べ1352人、日系社会シニアボランティアは10カ国・延べ502人を派遣しました。このうち2376人が、3月31日現在も活動中です。

国際緊急援助隊救助チーム、48時間の実践的な模擬訓練を実施

02



厳しい環境の下、要救助者の救出訓練などが行われた

JICAは3月12日から3月14日まで、海外の大規模災害に対して派遣される国際緊急援助隊(JDR)救助チームの実践的な総合訓練を、兵庫県広域防災センターなどで実施しました。

海外で大規模な自然災害などが発生した際は、被災国政府からの支援要請を受けて、日本政府がJDRチームの派遣を決定し、JICAが同チームを派遣しています。このうち救助チームは、主に地震で倒壊した建物などに取り残された人々の捜索・救助を目的としています。今回の総合訓練は、チームの即応力と国際基準で定める捜索・救助手法を実動で確認するため、隊員72名と救助犬4頭が、昼夜を通して48時間連続の訓練に挑み、救助隊員、外務省職員、医療関係者、構造評価専門家、業務調整員など、おのおのが役割に即した内容の訓練を行いました。

また、ASEAN防災人道支援調整センター(AHANセンター)の職員ら4人と、ミャンマー消防局の局長など3人もこの日にあわせて来日し、視察に加えて訓練の一部に参加しました。

ミャンマー地方部の中核病院における施設・機材を整備

03



調印式で握手するミャンマー保健スポーツ省のシンハン局長とJICAミャンマー事務所の岩井伸夫氏

JICAは4月2日、ミャンマー連邦共和国のダウエーで、「マグウエイ総合病院整備計画」を対象に、22億8100万円を限度とする無償資金協力の贈与契約を、同国政府と締結しました。

本事業は、同国中部にあるマグウエイ地域の「中核病院」「マグウエイ総合病院」の敷地内に産婦人科病棟、新生児ユニット、救急部門、手術部門を含む新棟を建設し、必要な機材供与を行うことにより、同病院の医療サービスの向上を図るものです。同病院では、施設・機材の破損や老朽化が進む一方、病床占有率は100%を超えるなど病床数も不足しており、施設・機材の整備が急務です。

本事業では、同病院の産科と婦人科で合計100床と新生児ユニット20床を整備すると並行して、外科、整形外科、産婦人科関連の施設と機材を整備し、適切な環境下での高度な手術や緊急手術を可能にするともに、手術数の増加にも対応することを見込んでいます。これにより、同病院の中核病院としての機能強化と保健・医療サービスの改善が期待されます。